



地上以外の永遠と、地上と——野見山朱鳥の晩年

友岡子郷

春落葉 いづれは 帰る 天の奥

野見山朱鳥が没した年の前年、昭和四十四年の作。すでに広く知られる。

一句をつらぬくものは、避けがたい死への予感であって、それがひそかな独白のように表出されている。死に隣る病床にあるものの孤独な感懐として、深く哀切なものながら、それはそのまま障りなく感受できる。とりたてて別段の不思議もないように読み手には思われる。したがって、見方によれば、朱鳥ふうの個人臭が消えて、よほど平淡な境地に至りつたというように印象されるであろう。

私も当初、そのように感じて読んだ。虚子はかつて『天馬』の序文で「異常たらんとする傾向」と評したが、そのような特異性は別人のように消え失せ、静謐、平明、だれの心にもすぐに交流する精神のありかたを感じた。「……いづれは帰る……」という、死期を覚悟することの普遍性が、目に

る死を間遠に思いがちな私などにも覆いかぶさってきて、ひとしお哀切な一刻をもった。

しかし、感傷に目が曇ってはならぬ。この作を何度か目にするうち、私には、どこか謎のような部分のあることが浮かんでくるのである。その一つは、上五の「春落葉」。また一つは、「天の奥」の「奥」である。

それらは私にとって謎なのであって、私が解こうとするほかないが、簡単には解ききれない。「春落葉」という季語の設定とそここめられた内意は何なのか？「天の奥」と「奥」の一語を加えた、その作者の心奥に閃めくものは何なのか？この作の構図をごくありきたりになぞることはできる。

——作者朱鳥の現にある場所は、「春落葉」の散り敷く大地。そして、死後帰する処は、「天の奥」。死は地上から天界へ昇華する。というように構図をなぞっても、あまりにありきたりにすぎよう。

そこで、「春」「いづれは帰る」「奥」とあえて抽出してみ

て、のっぴきならぬ「死」の予感と、それにまつわる「春」「奥」の情意との渾和の総体に、私はあらためて目を注がねばなるまい。朱鳥晩年の詩境の内側をそこから思いがけず隙見できるかも知れないのである。

二十年以上も前、「野見山朱鳥私論」という冗長な文を書いたことを、恥かしい思いで思い出す。あれは論というほどのものではなく、朱鳥という華麗な作家を勝手に主人公に見立てた、下手糞な脚本のようなものだった。八十枚位書いたから、当の朱鳥に「今までに見た朱鳥論よりずっと長い」と言われた。

あの下手な脚本の筋立てを決めたきっかけは、二つあって、一つは朱鳥の小説『死の湖』（昭32）、一つは句集『天馬』（昭29）巻尾の二句である。『死の湖』は、永遠の愛を希願する画家と夫人が彼岸に回生しようとするストーリー、

「天馬」巻尾の二句は、次の作である。

ひとの世のありしはむかし山火燃ゆ

人滅びぬ神よ山火を消したまへ

この二句の出来栄えに注目したのではない。これらは失敗作の部類である。が、人間（当然、当の朱鳥も含まれる）を滅亡させてしまった以上、朱鳥の想像力は強引に極限にまで達したと見るほかはないであろう。こんなことを二度と言え

るものではない。朱鳥の想像力による劇の、これは歴然とした終末であろう。

とすれば、朱鳥は、自身も含めた人間の回生を想定しなければならなくなる。回生（廃墟たる地上への復帰）を基調とした想像力の展開を新たに試みなければならなくなる。そこで、うまい具合に『死の湖』のテーマが重なり合う。『天馬』以後の朱鳥の句業『荊冠』（昭34、『運命』（昭37）などは、回生を基調とする想像力の展開、言い換えれば、永遠なるものへの渴望と希求、地上を廃墟と見なすなかで神（あるいは神の痕跡）を透視せんとする意志……であるはずである、という見立てが成立する。

もちろん、以上のことは私の筋立ての後半部のこと、朱鳥初期の『曼珠沙華』（昭25）から『天馬』にかけての時代が、その前半部になる。その部分に関しても、前々から私なりに感じてきた見立てがあった。

初期の朱鳥の熱烈な、華麗な比喻表現は、どう見ても、ありきたりの写生による即物表現の域をはつきりと超過したものである。現実には信をおく精神ではない。むしろ、現実のあらかたに激しい不信を投げかけて、その狭隘な枠をみずからの想像力の飛躍によって破裂させようとする精神ではないか。実質のロマンティスト。そして、その熱烈な想像力の源として、朱鳥の天性はもとより、思うにまかせぬ不運な病身ということが考えられるのではないか。ざっと、そんなふうな見立てであった。

したがって、朱鳥の現実不信の想像力に過速度が加わる（虚子は「異常たらんとする傾向」と言う）につれ、「梅雨

茸の咲くわが棺に腰掛けて」程度では収まらず、結局「人滅びぬ」にまで到達するはずなのであった。

若気の至りで書いた筋立てをここでまた復誦して、はた迷惑な話になったが、野見山朱鳥生涯の仕事をつらぬく詩精神として、永遠なるもの・回生への渴望と希求があったことは確実である。ただし、それを現実不信の想像力の行きつく果てに見ようとしたのは、ひとり勝手な脚色であったかも知れぬ。永遠を希求する朱鳥は、現実には永遠は留まらないから不満だ、と終始思いつづけていたわけであった。

私は自分の内奥から地上以外の永遠を感じようとする。孤独とはひとりになつて淋しい思ひをすることではなく、肉体を通過する霊の影の認識なのである。私もやがて地上を去るであらうが、地上に永遠を留めることは出来ない。

あらためて読み返した『死の湖』に、そんなことばがあった。

*

「私は自分の内奥から地上以外の永遠を感じようとする」とは、そのまま朱鳥の実作をつらぬく希求にはかならない。朱鳥らしく、ペダンティックにひびくことばである。確かに朱鳥は、「自分の内奥から」という起点を一貫して保持しつづけてきた。美に対する嗜好がきびしく、扱う素材にもそれは及んでいる。「地上以外の永遠」もまた、朱鳥の一貫した詩的目標であるが、現に「地上」にあつて、いかに「地上以

外の永遠」を感じしようとしたかという点では、一定の推移があったと考えられる。

『曼珠沙華』から『天馬』へ。『荊冠』から『運命』へ——。そして、朱鳥没後の二冊の句集『幻日』『愁絶』（ともに昭45）へと、一定の推移が認められる。その場合、推移の判断の手掛かりは、「地上以外の永遠を感じようとする」点での変わらぬ一貫性を前提としつつも、それを現に感取すべき場・「地上」に対して、朱鳥がどのように認識していただろうかを探ることである。初期の朱鳥にとって、現実・地上は、美的想像力によって打破すべき対象であった。中期の朱鳥にとって、それは、神（美）・永遠を求めきまよう廃墟であった。

そして、晩年の朱鳥にとって、現実・地上は、どのように認識されていたのであろうか。

『幻日』と『愁絶』とは、その創作条件がまるで違っている。『幻日』の頃の朱鳥は、比較的健康に恵まれ、かなり長期の旅を度重ねているが、『愁絶』の朱鳥は、死に至る病床生活であった。したがって、現実・地上に接する範囲が、『幻日』ではつぎつぎと広く多趣であるが、『愁絶』では身辺の外界があるにすぎない。

しかしながら、『幻日』から『愁絶』へ、その現実・地上に対する認識にはほぼ共通するものがある。この時期の朱鳥にとって、それは、以前とは違う、さまざまに興味をそそる親愛なものになっている。総じてそういう印象がある。むろ

ん、朱鳥の「永遠」観はゆるぎないであろうが、「地上以外の永遠」は、じつは現にある「地上」から垣間見るほかなく、また垣間見ることができ、という認識への到達を思わせるのである。

いま生れし星やはらかし枯木空
わが胸の虹雲海の虹を呼ぶ
ふる雪に手をのべて雪とどまらず
雪ふると百済恋しき観世音
み心に添ひ咲くさくら散るさくら

『幻日』は、相次ぐ旅の作品に埋められていて、それらの旅にかりたてる動機には、地上のもの（あくまで朱鳥好みの素材だが）への新たな好奇心の噴出があったにちがいない。

だが、にわかに朱鳥の舞台は暗転する。病褥が宣せられて、病床裡の起居となる。好んで動き回り、永遠との出会いを求める夢は凍結される。局限された地上の世界が与えられているにすぎぬ。朱鳥晩年の『愁絶』は、そういう舞台であった。

『愁絶』には、すでに多くの人々を感嘆せしめた、凄愴、清冽な作品が並んでいる。

はるかなるものの身近や昼寝覚
法師蟬に鳴きすがらるるはるかかな
徹の中きらりきらりと一と日過ぐ
けふの日の終る影曳き糸すすき
一片の落花生死の外へ飛ぶ

火の隙間より花の世を見たる悔
夏果てのひかりうするる水の上
初秋と思ふはるかだとも思ふ
大寒のみつめるしもの光り出す
つひに吾れも枯野のときはき樹となるか
一枚の落葉となりて昏睡す
睡りては時を失ふ薄氷
きさらぎの片雲のまかがやきを見る
絶命の寸前にして春の霜
亡き母と普賢と見をる冬の夜
ここに引いた作品もそうだが、晩年の朱鳥には、「ひかり」「はるか」の語が多出する。それはおそらく、表現技法上の慣れというようなことではなく、晩年の朱鳥の詩境——生きる精神の表象と言ふべきものであろう。

私は、私なりに作品のそれらを讀んだ上で、次のように符合させて了解しておきたい。「ひかり」と、現実・地上への新たな親和、愛……、「はるか」と、死（回生）の予感、及び永遠への希求……、というように。

春落葉いづれは帰る天の奥

地上なる「春落葉」、その「春」にこもるものは、自己愛、自己慰藉であろうか。「天の奥」の「奥」にこもるものは、永遠への希求であろうか。死に臨む朱鳥の胸奥にあったものは、これらの透明なしのき、不思議な渾和であった、という気がしてならない。朱鳥の秘密の劇である。